# 紺田千登史教授退職記念号によせて

對　馬　路　人

紺田先生が専任の教員として本学社会学部に赴任されましたのは、社会学部が創設されてあまり年月を経ていない、そしてあの大学紛争の火の手が上がろうとしていた1967年のことでした。先生は1960年に大阪大学文学部哲学科を卒業された後、同大学の大学院（文学研究科哲学哲学史専攻）に進学されました。1963年には修士課程を修了され、博士課程に進まれますが、翌年の10月には先生はフランス哲学研究のためフランス政府給費留学生としてフランス・パリ大学大学院に旅立たれます。関西学院との縁についていうと、このパリ時代に同じ留学生だった森川甫名誉教授や、当時パリに滞在されていた小関藤一郎名誉教授から社会学部への勧誘があったそうです。先生は二年半のフランスでの研究を終えられ、1967年春に大阪大学大学院に帰学されますが、早速同年４月より本学社会学部のフランス語非常勤講師として出講され、同年10月には社会学部専任講師（フランス語、哲学担当）に就任されました。

その後、先生は1971年４月には助教授に、1977年４月には教授に昇任され、今日に至っています。また、本学に独立の大学院・言語コミュニケーション文化研究科が設立されましてからは、2000年８月に同修士課程指導教授（地域文化学特殊講義Ｄ（フランス）、課題研究担当）更に2002年８月には同博士課程前期・後期課程教授に合格され、大学院での研究指導にも当たられてこられました。本学に赴任されてより、動乱の時代を乗り越えられ、実に38年の長きにわたりお勤めいただいたことになります。

紺田先生のご専門の研究分野は哲学、とりわけフランスの哲学であります。ベルグソン、メルロー・ポンティ、デカルト、ルソーなどの哲学や思想を特に「ボン・サンス（良識）」の本性や働きという視点から深く分析されました。しかもそれはフランスだけでなく、夏目漱石や中江兆民といった日本の思想家や、アメリカの哲学、心理学との比較を視野に収めたスケールの大きい研究でした。先生はそれらの成果を二冊のご著書にまとめられていますが、その一つ『フランス哲学と現実感覚―そのボン・サンスの系譜をたどる』によって2003年に博士（哲学）の学位を授与されました。

教育の面では先生はご専門の哲学と共に、社会学部のフランス語教育の展開に大きな力を振るわれました。森川名誉教授と共に今日の社会学部のフランス語教育のシステムを作ってこられたといっても過言ではないといえます。また、先生の哲学・思想への深い造詣は、哲学や思想の講読演習を含む社会学部独自の言語教育を大変実り豊かなものにしてくれました。更に、独立大学院・言語コミュニケーション文化研究科の設立にあたっては、準備段階から関わられるとともに、設立後は大学院生の指導にも力を尽くされました。

こうした研究、教育の傍ら、先生は学生副部長（1978年４月～1981年３月）、学長補佐（1981年10月～1982年３月、及び1990年４月～1991年３月）、学長代理（1991年４月～1992年３月）など、責任の重い大学の役職も次々引き受けられてきました。また、1970年代の半ばに学内で生じた差別問題をきっかけとして誕生した「同和教育研究プロジェクトチーム」に加わられると、それをご自身の哲学研究の重要な課題として受け止められ、人権の問題に大変真摯に取り組んでこられました。

紺田先生は哲学を専攻されましたが、決して近寄りがたい方ではありませんでした。誰に対してもソフトな物腰で、暖かく接しておられました。また、お酒を愛し、歌を愛する、人情味の溢れるお方でもありました。先生の歌われるシャンソン風の哀調を帯びた美空ひばりは絶品でした。一方、先生は優しいだけの方でもありませんでした。同時に自分の姿勢をゆるがせにしない一徹さもお持ちでした。先生は大学紛争の嵐の時期に関学に赴任され、さらにその後遺症を引きずる難しい時期を過ごされましたが、その間毅然とした姿勢を保ち続けられました。その意味で先生は信念の人でもありました。

社会学部の基礎を作り、また激動期をくぐってこられた先生がまた一人去られるということで、大変寂

しくはございますが、先生には今後とも社会学部の行く末を見守っていただき、厳しい叱咤と暖かい激励をお願いいたします。

本号を「紺田教授退職記念号」とさせていただき、先生の長年のお働きに感謝しますとともに、これからの先生の人生のさらに実り多きことを祈念いたします。